

1 MAJIRI フィギュア 馬尻所蔵



2 屋根付き木の看板 永坂更科布屋太兵衛所蔵



3 タヌキ ためき煎餅所蔵



4 陶器フィギュア 作:吉川千香子 ギャラリーくめ所蔵



5 提灯 総本家更科堀井所蔵



6 太陽門扉 作:長命佳孝 門扉デザイン:山内玲子 HOU所蔵



9 浪頭 わらやき屋・ダイヤモンドダイニング所蔵

アートな麻布に魅せられて④

ポップ・アートとはなに？

なぜAZABU ポップ・アートを語る前に、元祖アメリカン ポップ・アートについてひとこと。

アメリカは1960年代に入るとケネディ大統領の誕生、公民権運動、ヒッピーの誕生などを契機に新旧の考え方の交代の時代を迎えました。同時に、大量生産・消費、広告、大衆時代が到来し、日常の生活と文化に変化が起きました。この転換期に今までとは異なる美術が生まれました。アンディ・ウォーホルの有名なハリウッド女優の「マリリン」、「キャンベル・スープI」などのシルクスクリーン、またロイ・リキテンスタインのドット柄を用いた作品などは、モチーフとしてピンナップガール、身近な日常の食品から看板の文字などを採り上げています。そして、普通の人びとが美術館だけではなく、日常生活の中で人気(POPULAR、POP語源)のアートを楽しみ、飾り、鑑賞する様になりました。

ここに、現代アメリカン ポップ・アートは新しい美術として、芸術の可能性を探しているといわれています。

AZABU ポップ・アート

六本木交差点から芋洗い坂、麻布十番商店街通り、麻布十番交差点にいたる道の両側に商店がならび、華やかな魅惑にあふれています。この界隈の色々な看板、FIGURE (人・物の像)などの表現は、前衛的な個性にあふれ、人の心に何かを感じさせてくれます。AZABU ポップ・アートとして楽しみください。

平成12年(2000)、交通の便が悪かった麻布十番に地下鉄南北線の駅が出来ました。その後、超現代的な超高層六本木ヒルズが誕生し、かつ外国人の居住も増えたAZABU界隈は転換期を迎えました。

それまで、この界隈は陸の孤島と言われ、江戸時代から続く商業地の文化や粋を色濃く残していました。一般的に、江戸時代の商店の看板は俗っぽく、面白かったようです。看板、フィギュアなどの文字や表現は、洒落や連想などの文脈で創られ、その背景に歌舞伎、浮世絵、落語などの大衆文化がありました。猪肉屋は看板に「山くじら」、鹿肉屋は「モミジ」と書いていたそうです。昔の肉食の禁令発布以来、何時のころからか肉を魚や植物に見立てて食べていた様です。さらに、焼芋屋の看板が「十三里」で栗(九里)より(四里)美味しいと判じ物になっていました。AZABU界隈の看板の「粋」は、今も色々工夫され、単なる広告を超えて、人々の心にゆとりを感じさせながら生き続けています。

「そば」の提灯は「あなたの傍がいい」・・・なんて。看板はポップなのです。

同時に、このAZABU界隈の変化は新しい広告物の表現を生み、アートの可能性を追求しています。看板よりもっとポップ度を上げて、時代の先端を走っているフィギュアに執心しています。コンピュータの2次元のバーチャルリアリティー(仮想現実)の時代に、この界隈のフィギュアは素材や表現などを多種多様にして、現実の世界で今様のポップな3次元造形を一步進んで試みています。AZABU界隈のどこにでも、なんでもあるAZABU ポップ・アートは、街の活性化にも貢献し、何気なく人を惹きつけて止むことがありません。そして、それらはいつでも、だれにでも、人と人が出会える現実の世界に、あるいは夢の世界にいざなっているように見えます。

「サクソフォンの扉を開けて、友とジャズの世界へ」・・・なんて。

現代を映し出し、またこの界隈でしか見られない、いつもあなたと共にあるAZABU ポップ・アートです。

- 参考文献/岩井 広實著 看板 ものとなりの文化史 法政大学出版局
三谷 一馬著 江戸看板図聚 中央公論新社
坪井 正五郎著 工商技藝 看板考 哲学書院
平芳 幸浩著 ポップ・アートと広告 越境する造形所収 永井 隆則編 見洋書
太田 喬夫著 ポップ・アート 現代アートのトポロジー所収 神林 恒道編 勁草書房
南 雄介監修・国立新美術館編集 アメリカン・ポップ・アート展 TBSテレビ

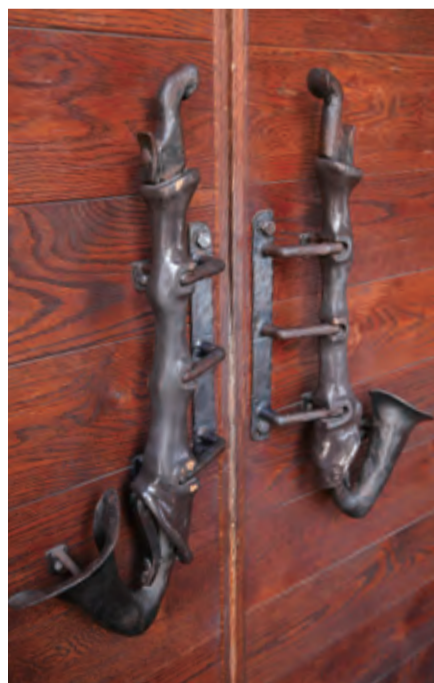
●AZABU ポップ・アートは場所・時期により変更があります。



7 MOKU1GP (シューズカー、アップサイクル) モクワンGP普及協会所蔵



8 フィギュア あじさいパーキング所蔵



10 サクソフォン型ドアノブ STB139所蔵



サクソフォン型ビール・サーバー STB139所蔵



11 KING WORLDSTAR CAFE所蔵



麻布

未来へ残したい麻布の声



小林石材工業株式会社
日本石材研究所会長
小林善勝さん
おもすけ



麻布十番雑色通りにある石材店。場所柄、寺町の墓石専門店かと思いきや、墓石はもちろん、建造物から造園、果ては日本各地のお城の石垣修復まで手掛ける石造物のエキスパート集団である。皇居、松本城、麻布地区でもフランス大使館や十番稲荷など、手掛けた仕事は枚挙に暇がない。海外からの発注もあるという。昭和2年に麻布十番で創業した老舗石材店の二代目“おもすけ”（石工業界独特の呼び名で親方という意味）の小林善勝さんに、石工の仕事や石の魅力について伺った。



修復後の仙台城の石垣



昭和13年正月の小林石材店
左端が先代おもすけの小林善一氏。石の破片避けの眼鏡を着用。当時は母(二列目左端より2人目)のお腹の中に。

平成16年3月、仙台城石垣修復工事竣工後の記念撮影
先代“大おもすけ”デザインの法被を現在も着用している。石屋の符牒では、石屋はなぜか「もくや」というそう。



石造物のエキスパート集団を引っ張る

運河の街、江戸東京

芝浦1丁目辺りに江戸時代の運河の名残をとどめる古川。この川は江戸の建築資材を運ぶ重要なルートだった。神奈川県の実鶴半島周辺で採石され、積み出された小松石は、船に乗せられて江戸湾に入る。大きく重い石は古川河口近く金杉橋の辺りに下ろされ、近辺には石問屋が立ち並んでいた。川をさかのぼった中ノ橋付近には砂利や小石を扱う店が、一の橋周辺は木材問屋、川底の浅くなった二の橋辺りは竹屋と、古川沿いには積荷の重さによって異なる建築資材を扱う専門家集団が集中していたのだという。

親子から師弟に

小林善勝さんは昭和13年生まれ。城南中学を卒業後、父親の善一さんに弟子入りした。善一さんは石造建築物の野丁場と呼ばれる建設現場で石工の経験を積み、二十歳で麻布に石材店を開業した、当時、東京一の腕前と言われていた名人で、十数人の弟子を抱えていたという。

石工の仕事は、時代によって大きく変化した。文明開化の明治・大正時代には、国会議事堂や明治生命本館など石造の建造物の仕事があったが、昭和の大恐慌で大規模工事が激減。石工達は墓石製作に携わるため各地の霊園に散って行った。太平洋戦争で、小林善勝さんが生まれた麻布一帯は焼野原になり、終戦直後は墓地を持たなかった人達が20年代半ば、戦死者の法要を機に墓標づくりを依頼するようになった。やがて朝鮮戦争による特需と戦後の高度経済成長で建築ラッシュが始まり、石工達は野丁場に戻って行ったのだという。

小林さんが石工の世界に入ったのはこの頃だった。小僧として弟子入りした小林さんは、仕事準備として道具を鍛える先輩石工のため、夜明け前から握り飯を片手に輪を吹き、石工の仕事を一から学んだという。戦前の野丁場で修練した石工に囲まれ、“みやご”（道具の意味）など石工独特の符牒までも、自然に身につけていった。

作業分野の拡大

先代は建造物と墓石のスペシャリストだったが、二代目の善勝さんは、造園や土木にも興味を示し、石工としての領域を広げていった。中でも、城の石垣については、日本中の文化財の修復現場から声が



麻布十番にある賢崇寺の改修前の階段
江戸時代に設置されたもので、鍋島藩の菩提寺であるため、殿様を載せた駕籠が大きく傾かないように、段差を小さくし、且つ、一段の奥行きを一步半と大きく取ってある。



現在の賢崇寺入口
周辺の開発にあたり小林石材工業が車道と階段を設置。絶妙な歩幅と段差で上りやすさ抜群。「健康階段」と名付け、トレーニングに利用する人もいる。

掛かる程だ。10年前、仙台城の石垣を修復。古代の技法そのものの版築^{はんちく}等を重ねた石の内側は揺るぎない強度で、東日本大震災でもビクともしなかった。石垣の修復については、“大おもすけ”（父 善一さん）から厳しく指導されてきた。「下手に石垣を積むと人命に関わる。現役でいる以上500年、1000年の間人を守る役割を持つものでなければならぬ」だから一つ一つの石に「頑張って」と願いをこめて組み上げる。“持たれ合わず”に“持ち合う”石垣は、それぞれの石が自分の責任を果たし、自然現象による多少の変化にもしっかり対応できるという。



手仕事の技術の伝承のため、道具を手仕事で仕上げ、データを残している。



金刃はその日の仕事によって焼き入れ方を変える。その扱いは夜が明けた後では明るすぎて判り辛くなる。

伝え受け継がれる職人魂

経験を積んだ石工は、石と会話をするという。昭和の後半には機械が発達し、ノミとげんのうを手で石をたたくことは少なくなってきた。均一性を求める機械仕上げと違い、石工の呼吸によって生じる微妙な差異は味わいを出すものである。石と向き合い、石の声を聴き、機械に頼らず自らが納得するまで手仕事で作業する。70代から20代までいる小林石材工業の石工達は、「500年後の子孫が誇りに思ってくれるようきちんとした仕事をしたい」と、熱意と責任を持って文化財修復に取り組んでいる。強制せずともそんな風習が受け継がれているのが小林さんの自慢だ。

あと15年で創業百年(2027年)となる小林石材工業だが、全国から発注が相次ぐようになり、小林さん自身は会社経営に専念するため数年前に引退を決意し、ノミとげんのうを置いた。石工の仕事は小林さんが育て上げた職人達が担っている。石が何より大好きな小林さん、「次に生まれてきた時は、生涯現役の石工でありたい」と柔らかくなった両手を恥じる様に見つめた。現在は社長職も退いているが、将来は一人娘が経営を引き継ぐことになっている。その娘さんは「同じイシヤでも、石屋でなく医者にならな」と言い、職人気質の気難しいイメージとは正反対の、ソフトで温かな笑顔を浮かべた。

* 版築: 土砂利砂を混ぜ合わせ、それを叩いて 堅固な土塁等をつくるための古来から伝わる技法。



昭和40年代、自宅前の小林さん(中央)石工に相応しい体躯とは、存外華奢な人が向いているとか。但し腰は大き目が宜しい。

(取材・文/出石供子)

ボクはうさぎ、名前はチョコ。東町小学校に住んでいます。

ワタシも麻布っ子

このコーナーでは、あなたの大切な“家族”を紹介していきます。

ちょっとお出かけしてみるか。



友だちが挨拶してくれます。

●食事は2回。朝と放課後です

ボクの世話は高学年の友だちがしてくれます。

2～3名の飼育当番が毎日交替で、朝8時と放課後、ケージ内を掃除して、ご飯を用意してくれます。ケージの外で、散歩もします。友だちが頭をなでてくれるので、気持ちいいです。(注 頭をなでてもらうのが、うさぎは大好きです)土曜・日曜は先生が来ます。夏休みは、保護者のおうちで預かってもらいました。ずっとケージにいることはなく、主事さんや先生が玄関ホールで



ただいまお散歩中です。

遊ばせてくれます。遊び疲れたら、ボクは自分でケージに戻るんだよ。えらいでしょ！ボクは人なつっこい性格なので、可愛がってくれる友だちのところに近寄って行くよ。慣れてくると、逃げ回ることもしず、かわいいんだ。



顔の中央が「大」ってわかる？でもボクの本名はチョコだよ。

●やさしい心に育ってほしい

ボクの住む東町小は国際学級なので、14カ国、200人(平成25年9月現在)の友だちが通学しています。低学年の友だちは、飼育係のお兄さん、お姉さんの世話を見に来ます。えさの量やトイレの掃除の仕方の説明を熱心に聞いています。お兄さんたちがボクの顔を見ながら「チョコの顔に『大』って描いてあるのわかる？」なんて言っています。「ホントだ〜」低学年の友だちも笑顔で大喜びです。ボクの顔を正面から見ると、たしかに『大』らしいです。皆さん、わかりますか？

先生は「チョコを飼うことで、生き物やひとへやさしく接し、子どもたちが命の大切さを感じられるようになってほしいと思っています」。ボクがいることで、その手伝いをできれば、とても幸せなことだと思います。



主事さんがやさしくなってくれるんだ。



校庭にあるうさぎ小屋。今は使っていません。

床にベタリ 寝そべってるよ。ボクって人なつっこいんだ。



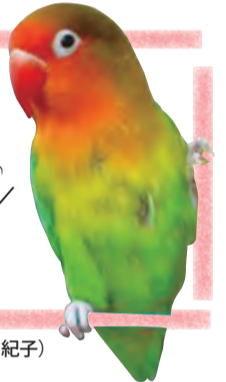
あなたの大好きな動物をご紹介下さい。

必ず写真を添えて、下記宛てに郵送ください。飼い主の自薦、他薦は問いません。飼い主と一緒に写真も掲載できます。ご応募多数の場合は編集会議に諮りますが、採否の審査過程のお問い合わせには応じかねます。採用させて頂く場合は改めて取材に伺います。お送り頂いた資料は採否に拘わらず返却致しませんので、予めご了承下さい。皆様からのご応募を心よりお待ちしております。

〒106-8515 港区六本木5-16-45

港区麻布地区総合支所 協働推進課 地区政策担当 「ワタシも麻布っ子」応募係

お待ちしております♪



(取材・文 高柳由紀子)



ラジオパーソナリティ クリス智子さん

ラジオのパーソナリティ、タレント。81.3FM J-WAVEの「atelier nova」(毎週土曜12:00～15:00放送)のナビゲーターとして活躍。

ラジオパーソナリティ

子どもに生きていく力を

KIDS! ハローワーク

親子で読んでみよう

トークの達人に極意を聴く

今回は、ラジオパーソナリティのお仕事です。六本木中学校の1年生3人が、六本木ヒルズにあるFMラジオ局J-WAVEを訪れ、生放送を見学。番組を終えたばかりのナビゲーター：クリス智子さんにお話を伺いました。

◎お仕事の内容は？

アートやデザインをテーマにした3時間の生番組で司会をしています。その分野のイベントを紹介したり、アートやデザインに携わる方をお呼びして話を伺ったりして、番組を進行します。

◎ゲストとのトークで心がけていることは？

相手の領域やその人に好奇心を持つことです。もちろん事前に予習して質問も準備しますが、トーク中にゲストが話すことを大切にしたいので、想定とは違う答えに「おもしろいっ!」と思ったら、そこをさらに突っ込んで聞いていきます。その場の話の流れに沿って進行していく、それが生トークの醍醐味です。生放送中、ゲストが話せる時間は限られているので、一緒に過ごす時間を素敵なものにしたいと思っています。

◎目の前のものをリスナーに言葉で伝えるには？

例えばケーキを紹介する場合、形状や材料の説明ばかりでなく、どんな風に美味しいのか、その感覚を自分の言葉で表現しようと努めています。リスナーに見えないからといってすべてを描写する必要はありません。肝心なのは“美味しい”というポイントを伝えることなのです。ケーキの味が思い浮かんでくるような伝え方をするのが理想です。

◎放送のない日はどう過ごしています？

1週間に3時間の生放送ですが、それ以外の時間をどう過ごすかが大事なんです。

何を見て、誰と話し、どういうことを感じ、どんな感想を持ち、何を不快に思ったか、などなど。番



生放送中のクリス智子さん

組に結びつくという意識でなくとも展覧会や美術館に行ったり、海岸を散歩したり、友人と食事しておしゃべりしたりする時間を大切にしています。そうして感性を磨くことを心掛けています。



番組のプロデューサー：朝倉さんに制作過程の説明を受け、自分たちで曲を選択し、スタジオでディレクター役やパーソナリティ役を体験しました。



これからもっとラジオを聴きたくなりました～!

◎どんな時にやりがいを感じますか？

話すのが苦手そうな人が心を開いて語り出してくれた瞬間ですかね。それと、番組を聴いた方から、「おもしろい、やってみよう」、「行ってみよう」など興味を持つきっかけになった、と言われるのが何より嬉しいです。

(取材/文 熊坂瑠家、高橋光汰、守山ジョシュア 取材サポート/出石供子)



エルサルバドル共和国
 面積： 21,040平方キロメートル(九州の約半分)
 人口： 約630万人(2012年、世銀)
 首都： サン・サルバドル
 言語： スペイン語
 宗教： カトリック教
 政体： 立憲共和制
 元首： カルロス・マウリシオ・フネス・カルタヘナ大統領(2009年6月～ 2014年5月、任期5年、連続再選禁止)
 議会： 一院制、議員定数84名、任期3年

外務省ホームページ
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/elsalvador/data.html>より

エルサルバドル共和国

取材協力/エルサルバドル共和国大使館

マルタ リディア セラヤンディア シスネロス大使

大使を訪ねて 25
 麻布の"世界"から

EL SALVADOR

日本への理解深く、母国の発展を願い
 多彩な活動をされる女性大使

今回お訪ねしたのは、西麻布のビルの一室にあるエルサルバドル大使館。マルタ
 リディア セラヤンディア シスネロス大使は、日本とは深い縁で結ばれた方で、語
 学がご堪能なことはもちろん、日本の文化・歴史への造詣も深い。日本との出会
 い、そして母国の平和と発展を願うお心のうちを熱く語っていただいた。

日本との出会いは、近代史を学んだこと

ご両親が学校を経営し、豊かな教育環境の中でのびやかに成長された大使。子どもの頃から外で遊ぶのが好きな、ご自身いわく「お転婆タイプ」で、学問も多方面の分野に興味があったそうだ。日本に関心をもったきっかけは、小学校6年生の世界史の授業で、第二次世界大戦において広島、長崎に原爆を落とされた史実を知ったこと。さらに中学生の時には、明治維新についてのスペイン語の書物を読んだことだという。「鎖国の時代が終了し、新しいリーダーたちによって世界に開かれた国が形成されていきました。そして先の大戦では、甚大な被害を受けながら、またも急成長を遂げていく。その力強さを素晴らしいと感じ、同時に、エルサルバドルにとっても学ぶことが多いのではと考えたのです」。ティーンエイジャーの頃から、母国を思い、世界に目を向けていたことがうかがえるお話だ。

大学在学中、仕事で訪れた日本人男性との出会いにより、日本とのかかわりが決定的なものとなった。結婚後、日本での暮らしが始まる。アクティブな女性のこと、子育てをしながらも、フリーランスでスペイン語、英語、日本語の通訳、翻



▲コーヒーはエルサルバドルの代表的な特産品。西部の地域に農園が広がり、温帯気候の高地は最高級のコーヒーを栽培するのに適している。



▲勤勉な職人は国のあちこちの町や村で、バラエティー豊かな工芸品を製作している。織物もその一つ。



▲伝統的な料理「ププサ」。トウモロコシの粉を材料にした生地に豚バラ肉と野菜を煮こみペーストにした具やチーズを入れて焼いたもの。各家庭の味がある。



▲マヤ文明時代の土器をモチーフにした、特長ある文様を施したやきものの器。土産品として人気があるそう。

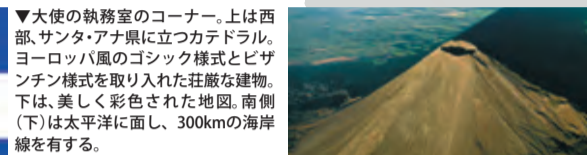
訳の仕事をごなし、いっぽうで茶道、華道、書道に親しみ日本文化への理解を深めていく。藤沢市に住んでいた時には、公立小学校で語学の指導や国際理解教育にも携わる。

そして2010年、本国からの要請により駐日エルサルバドル共和国大使館、公使参事官兼代理大使に、2011年には大使に就任。つまり、民間からの抜擢である。「とはいえ、小さな国の大使です。最初の頃は私一人で業務をこなしていました。かかってきた電話に直接出て『私が大使です』と言うと変に思われるので、声色を変えまはる秘書のふりをしてみたり。」と、なんとも親しみ深いお人柄なのである。

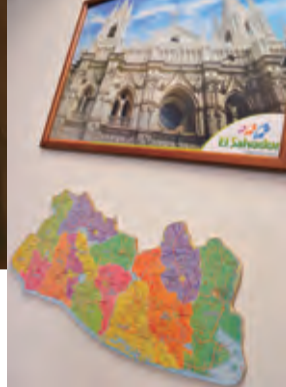
母国の平和と発展を願って

そんな気さくな大使が、積極的に取組まれていることの一つが、全国各地の学校訪問と子どもたちとの交流だ。麻布地区では今年、本村小学校の給食のデザートに「ケサディーヤ」という、エルサルバドルのチーズケーキがお目見えした。昨年、同校の保護者向けに開催したエルサルバドル料理の講習会で、好評を博したことがきっかけだそう。給食の時間へも駆けつけて、子どもたちに同国の紹介やじゃんけんのような遊びを教えて親しんでもらったという。また、エルサルバドルの伝統的な料理「ププサ」にあやかって、小リスの「ププサ」くんという「ゆるキャラ」も大使ご自身が考案し、近くイベントなどに登場するとのことだ。

このような草の根交流に積極的に取組む原動力となっているのは、母国への熱き思いだと拝察される。エルサルバドルは約12年続いた激しい内戦の末、1992年1月16日に和平合意に達した。当時、「このまま殺戮が続けば国が減びるからと、政府とゲリラの双方が武器を捨てて対話し、和平に至ったのです。この終結の仕方に私は誇りを持っています。」と、真剣なまなざしで語られたのが印象深い。和平プロセスを進める中で、2度の地震や大洪水等の自然災害にも見舞われた。だが、災害復興にも辛抱強く取組み、内戦の原因であった貧困の撲滅の取組みや民主化の定着も進めて、今日に至る。「その意味で、エルサルバドルはやっとスタート地点に立ったと言えるでしょう。日本の多くの方に国のことを知ってもらい、長期的なより深い友好関係を築い



▼大使の執務室のコーナー。上は西部、サンタ・アナ県に立つカテドラル。ヨーロッパ風のゴシック様式とビザンチン様式を取り入れた荘厳な建物。下は、美しく彩色された地図。南側(下)は太平洋に面し、300kmの海岸線を有する。



▲大使館の入り口には、エルサルバドルの国旗が、5つの旗は、1823年から1839年まで存在した中央アメリカ連邦共和国の5カ国(エルサルバドル、グアテマラ、ボンジュラス、ニカラガ、コスタリカ)を表す。



▲狭い国土に25を超える火山を抱える。コーヒーや砂糖キビなどの農作物の栽培に欠かせない肥沃な土壌をもたらしている。観光アトラクションとして、ハイキングなども楽しめる。



▲緑の多く残る首都、サン・サルバドルの街並み。サン・サルバドル空港は近代的で利用者が多く、中米の玄関口。



▲大使が考案した「ゆるキャラ」の子リス、「ププサ」くん。国立人類学博物館刊行の図録で見つけた古代のリスの土器にヒントを得た。



▲大使の執務室にかけられた、中米、中南米の女性をモチーフにした絵画。立体的に見える画法と、マヤンブルーという鮮やかな青が特徴。

ていきたいと考えています。」
 また、エルサルバドルは日本から遥かに遠く、面積は九州の約半分程度だが、意外にも日本との共通点も多い。「火山を有し、地震や気候変動など自然災害が頻発します。天然資源にも恵まれておらず、国民みずからものづくりをしなければなりません。エルサルバドル人は日本人のように、辛抱強く、勤勉な性格です。」また、マヤ文明圏の遺産が豊富なことでも知られ、カトリック教徒が多いものの、日本の神道のように自然や万物に神が宿るといふマヤ文明からの民間信仰が息づいているというの興味深い。

日本との外交関係は2015年に80周年を迎える。今までの歴史的な出来事を振りかえってみても、両国は強い絆によって結ばれてきた。「たとえば、戦後日本初の製造企業の海外進出先はエルサルバドルでした。設立されたユサ社は、現在も健全な繊維系の企業として続いています。当時、発展に尽力した平生三郎氏をたたえる日本庭園が首都サン・サルバドルにつくられ、現在でも市民の憩いの場所となっています。」そして、目下、大使が温めているのが日本人向けの観光旅行の企画だという。多くの日本人に母国を訪れて欲しいと語られる大使の笑顔に誘われて、かの地へ思いを馳せた。

(取材/大澤佳枝、折戸桂子、田中亜紀 文/大澤佳枝、田中亜紀)

麻布 未来写真館

麻布の交通の今と昔

古川橋は明治通りの起点であり、かつては数多くの都電が走る主要な停留所・乗り換え地点として有名でした。古川沿いには船による資材の運び入れが可能であったことから、多くの工場が立ち並び、にぎわっていました。今回は、そんな麻布の交通の要衝、古川橋の今と昔を写真で見比べてみました。



昭和42年(1967年)：古川橋交差点より白金高輪駅方面を望む。写真撮影：田口政典氏 写真提供：田口重久氏

46年前、首都高は建設中で、白金高輪(五反田方面)に向かう国道1号線はまだ無かった。都電の線路がある道は魚籃坂方面に続いていた。写真中央の自動車の下や、右側の歩道が工事が盛んであったことを物語る。車道の土がむき出しになっているのは今では珍しい光景かも知れない。



昭和44年(1969年)：古川橋交差点より明治通り、天現寺橋交差点方面を望む。写真撮影：田口政典氏 写真提供：田口重久氏

44年前は都電が走り、現在は都バスが走る。一見すると「都電」と「都バス」以外は何の変哲も無いように見えるが、現在の写真では首都高速に防護フェンスが設置されている。また、昭和44年の写真の橋方面から天現寺橋方面への右折レーンが都電の左側だったとすると、相当なカーブであったと思う。



昭和44年(1969年)：古川橋交差点より麻布十番方面を望む。写真撮影：田口政典氏 写真提供：田口重久氏

44年前の写真は現在の写真よりも風景が抜けている。高層建築物が無いなによりもの証拠。都電が自動車と併走している風景は、今では信じ難いが、写真で見る限りそこまで手狭に感じない。また、通り沿いの銀杏並木の成長ぶりもうかがえる。



平成24年(2012年)：古川橋交差点



平成24年(2012年)：古川橋交差点



平成24年(2012年)：桜田通り

「麻布未来写真館」とは

港区麻布地区総合支所では、平成21年度から区民や企業等と協働し、麻布地区の昔の写真などを収集するとともに、定点写真を撮影し、麻布のまちの変化を保存する取組みとして「麻布未来写真館」事業を運営しています。

当事業は、麻布地区の資料収集・保存していくことを通じて、麻布地区に暮らす人々にとって身近な歴史・文化資源を保全・継承するとともに、より一層の活用を目的としています。

同時に、「まち」の歴史や文化をより多くの皆様へ知っていただき、麻布地区への愛着を深めていただく一助となることを目指しています。

「麻布未来写真館」では、古い写真を探しています。

未来に向けて、残し、伝えていくべきと感じになる「麻布地区の古い写真」がありましたら、港区麻布地区総合支所までお寄せください。詳細につきましては、「協働推進課地区政策担当」までお問合せください。
お問合せ 電話：03-5114-8812

(取材・文/田中康寛)

地域社会のゆくえ

13

「逃げ出す街」から「逃げ込める街」へ 地域の防災拠点を目指す六本木ヒルズの先進的な取組みに学ぶ

東日本大震災であぶりだされた「帰宅困難者」の問題。以降、どうやって職場や外出先から家に帰るかという情報は豊富になりましたが、「街」は逃げ出す場所なのでしょうか。

麻布地区総合支所では、災害発生時における帰宅困難者対策及び地域防災力の向上を目的として事業者や団体が構成する「麻布地区事業所防災ネットワーク会議」を設置しています。

そのメンバーであり、災害時に「逃げ出す街」ではなく「逃げ込める街」を掲げ、港区と「災害時における帰宅困難者受入れ等に関する協定」を結んでいる森ビルの取組みを今回紹介します。

社員全員が有事には防災要員となる体制を、さらに六本木ヒルズで帰宅困難者5000人を受け入れる準備を整えています。先進的な取組みについて震災対策室 日向真一郎さんにお話を伺いました。



お話を伺った震災対策室事務局 日向真一郎さん。

3.11東日本大震災の六本木ヒルズ

避難してきた人やオフィス勤務の人も含めて1500人分の備蓄品を配りました。また、帰ることが難しい妊婦さんや乳児を連れている人など8組を提携する宿泊施設に案内しました。東日本大震災ではその日のうちに電車が動いたこともあり特に混乱はありませんでしたが、この経



震災時に帰宅困難者5000人を受け入れる商業ゾーン。

験をふまえて、水の備蓄を増加したり、回収後にクリーニングが必要な毛布から手のひらサイズのアルミ製シートに変えるなど改善しました。

社員は全員防災要員。救命講習資格保持

震災対策室は兼任含め約30名。社員は入社時に安全靴・ヘルメット・つなぎの3点セットを貸与され、救命講習資格を取得。有事の際には2.5km以内に配置された社宅から駆け付ける社員も含め、日ごろから訓練された1300人が復旧などの対応にあたります。

六本木ヒルズ勤務の社員やテナント、帰宅困難者用に10万食の食糧、毛布やレスキューセット、衛生用品などを巨大な倉庫に備蓄しています。

私たちがこの取組みに学ぶこと

これだけの体制を整え、「どうぞ逃げ込んでください」と公表していること、とても心強い

ですね。ディベロッパーと一般の企業とは立場の違いはありますが大いに学ぶところがあります。

企業はまず最低限自社の社員を帰宅困難者にしないよう備えること。そして、自分たちの分だけではなく困っている誰かひとりでも受け入れられるようにしたら・・・また大きな災害がおきても乗り越えていけるのではないのでしょうか。

六本木ヒルズで実施する防災イベント

- 震災訓練…毎年3月11日前後に実施
- 「ヒルズ街育プロジェクト」にて安全についての体験学習プログラム(対象:小学生) …毎年主に夏休みに開催



倉庫いっぱいの防災グッズ。賞味期限の近くなった備蓄食糧は防災イベントや食糧支援を行っているNPOに寄贈しています。

※麻布地区事業者防災ネットワーク会議に関する問合せはこちらまで(麻布地区総合支所まちづくり推進担当 電話/03-5114-8815)
(株)森ビルの防災対策に関する問合せはこちらまで(電話/03-6406-6606) 森ビルHP <http://www.mori.co.jp/>

(取材・文/満木葉子)



仙台坂上(2013年11月撮影)



仙台坂下(2013年11月撮影)

南麻布1丁目から元麻布1丁目の境を結ぶ1本の坂。

一説に、その昔、この坂の中腹に仙台藩下屋敷があったことから“仙台坂”と命名された、とされている。

麻布にありながら“仙台”を冠する地名が今もなお残る。

名前を付けた当時から何某かの親しみが住人達の間であったのかも知れない。

実は、前号(「大使を訪ねて 麻布の“世界”から」:スペイン、「麻布未来写真館」:~麻布・仙台坂を臨んで~)の取材を通じて、ふと気付いたことがあった。それは思いがけない“符合”であったので驚いた。

何か^{そそ}漫る麻布の中の“仙台”に^{そそ}唆られ、その“符合”を追ってみた。

奇跡の軌跡

ふと気付いた“符合”とは何か？

まずは下の年表をご覧ください。

1611年	陸奥慶長地震(M8.1)	2011年	東日本大震災(M9.0)
1613年	慶長遣欧使節が石巻を出航	2013年	東京五輪招致決定
1620年	慶長遣欧使節(支倉常長)帰国	2020年	東京五輪開催

江戸時代の出来事を左側に、最近の出来事を右側に並べてみた。左右の出来事の中に『400年』という符合があることがわかりいただけるだろうか？

400年前に仙台で今と同じ規模の天災があったことも驚きだが、震災復興を外交に賭けた“軌跡”もまた酷似している点は“奇跡”としか言いようがない。

400年前の仙台で何が起きていたかをもう少し深く掘り下げてみよう。

400年前の軌跡

1611年12月2日(慶長16年10月28日)、岩手県三陸沖を震源とするM8.1規模の地震が発生した(震源・規模には諸説があり、現在も調査されている)。地震による被害よりも津波による被害が大きかったことから津波地震と推定されている。津波は田老(現・岩手県宮古市)や大船渡(現・岩手県大船渡市)で最高20m前後の高さであったとされる。

私達は東日本大震災を目の当たりとしているだけに、この時の被害も相当なものであったことは容易に想像できる。

この地を統轄していた仙台藩主・伊達政宗は、当時世界最大の植民地帝国であったエスパーニャ帝国(スペイン)との外交を求め“慶長遣欧使節”派遣を決める。震災の2年後、1613年10月28日(慶長18年9月15日)、仙台藩士^{はやくらつねなが}支倉常長を大使とする“慶長遣欧使節”は、日本では最初に建造された帆船、サン・ファン・パウティスタ号で月浦(現在の宮城県石巻市)を出航し、ヌエバ・エスパーニャ(現在のメキシコ)太平洋岸のアカブルコへ向かった。



慶長使節船「サン・ファン・パウティスタ」(宮城県慶長使節船ミュージアムに展示公開中)。1993年に復元された。驚くべきことに、この復元船は東日本大震災の津波にも耐え抜いた。これは当時の技術力がいかに高かったかを物語っている。常長(遣欧使節)の魂が宿っていたのかも知れない。

東日本大震災(2011年)から2年後の東京五輪招致決定(2013年)への流れが“震災復興”への大きな一歩となる契機をつかんだ、という現在の状況を考えると、“慶長遣欧使節”派遣の背景にも少なからず“震災復興”への願いが込められていたのではないだろうか。

想像していただきたい。

東日本大震災から2年後の現在、石巻で日本初の最新鋭豪華客船が建造され、出航するとしたら…。それは「驚くべきこと」ではあるまいか？

しかし、この想像は400年も前に実施された史実であり且つそれは、にわかな思い付きで出たものではないだろう。“被災”という辛酸が原動力の1つとなったであろうことは否み難いように思う。

話を使節の“軌跡”に戻そう。

常長ら一行は1615年にはエスパーニャの首都マドリッドで国王フェリペ3世に謁見。同年ローマへ渡り、ローマ教皇パウロ5世に謁



「ローマ教皇パウロ五世像」(国宝・仙台市博物館蔵)。



「支倉常長像」(国宝・仙台市博物館蔵)。日本に残される油彩画の中で、実在の日本人が描かれた最も古い作品とされる。



「ローマ市公民権証書」(国宝・仙台市博物館蔵)。ローマ市議会が支倉常長にローマ市の公民権を与え、貴族に列する旨を認めた証書。

見。この時ローマ市公民権証書が授与された。常長たちが、いかに歓待されたかが伺える。あらゆる艱難辛苦を乗り越えた末での“遣欧”でありながら、帰結するところ“慶長遣欧使節”の外交交渉は大きな成果をあげることができなかった。当時の日本は鎖国政策を取り、大規模なキリスト教徒の弾圧を行っていた。このことが、国王に伝わったことが大きな一因だった。1620年9月20日<※22日とする説もある>(元和6年8月24日)、支倉常長は失意の中、仙台へ戻る。

400年後の奇跡

支倉常長の偉業は400年後、思いがけない形で称えられることとなる。

2013年6月18日、常長が持ち帰った品々、「慶長遣欧使節関係資料」がスペインとの共同推薦により、ユネスコ記憶遺産に登録されたのである。日本からの登録は「ローマ市公民権証書」、「支倉常長像」、「ローマ教皇パウロ五世像」の3点。

これは東日本大震災後の仙台に、どれだけか明るいニュースとなっただろうか。そして9月8日、東京五輪招致が決まった。最終選考でスペインのマドリッドと競ったことは、400年前の軌跡から考えると“運命”だったのかも知れない。

今年から2014年7月にかけて「日本スペイン交流400周年事業」が開催されることとなり、慶長遣欧使節の“思い”は今の日本とスペイン両国に新しい、より深い絆をもたらしてくれることとなった。

2013年、「2020東京オリンピック開催」という、大きな船が出航する。待ち受ける幾多の嵐を乗り越えて、2020年には世界中の人々の夢を、希望を乗せて戻ってきて欲しい。400年の時を経て常長たち“慶長遣欧使節”の、現在の私達への、牽いては未来へのエールが聞こえてくるようだ。

麻布の中の“仙台”に勇氣と誇らしさを感じることができた。

参考文献

濱田直嗣著「政宗の夢 常長の現—慶長使節四百年」

河北新報出版センター

太田尚樹著「支倉常長遣欧使節もうひとつの遺産—その旅路と日本姓スペイン人たち—」

山川出版社

麻布の中の軌跡



仙台藩下屋敷近辺の古地図(「増補港区近代沿革図集」より)



麻布地区地域事業について

今回は、麻布地区総合支所が独自に実施する12の地域事業のうち、「地域サロン事業」「おもちゃライブラリー」「あざぶ達人倶楽部事業」の3事業をご紹介します。

10 地域サロン事業

【事業化に至った課題認識】

高齢者が、住み慣れた地域でいつまでも安心して暮らせるように、地域で支えあう体制を整備・推進していきます。

【事業の内容】

地域社会で孤立しがちな高齢者の安全・安心を確保するため、地域住民と連携し、高齢者の居場所としての地域サロンを充実させるとともに、地域ボランティアの養成を図っていきます。



全体計画目標 (26年度末)	現状 (23年度末見込)	事業計画			
		24年度	25年度	26年度	計
実施	サロン1か所	サロン充実ボランティア養成	サロン充実ボランティア養成	サロン充実ボランティア養成	サロン充実ボランティア養成

11 おもちゃライブラリー

【事業化に至った課題認識】

子育て情報の提供や良質な遊具の貸し出し等をとおして、孤独になりがちな子育て世代を支援し、交流機会の拡大を図る必要があります。

【事業の内容】

子育て支援事業の一環として、乳幼児を対象とした良質なおもちゃの提供と普及をめざし、おもちゃの貸し出し事業を行います。

おもちゃは、区で購入したものや、不用となり寄贈を受けたおもちゃを活用します。また、貸し出しとあわせて、講演等も行い、保護者への啓発活動も行います。

全体計画目標 (26年度末)	現状 (23年度末見込)	事業計画			
		24年度	25年度	26年度	計
貸し出し事業実施2か所 講演会 9回	貸し出し事業実施2か所	貸し出し事業実施2か所 講演会3回	貸し出し事業実施2か所 講演会3回	貸し出し事業実施2か所 講演会3回	貸し出し事業実施2か所 講演会9回

12 あざぶ達人倶楽部事業(旧名称:麻布ものしり認定制度)

【事業化に至った課題認識】

区民自らが地域の課題を解決する地域づくりが求められています。一方で、社会経済状況の変化に伴い、地域が抱える課題も多様化しています。また、地域の課題解決の担い手となり、地域の中核となる人材は限られています。



【事業の内容】

麻布地区の歴史や文化及び産業等に関して、地域に精通したコミュニティの担い手となる人材を幅広く発掘し支援します。麻布地区の企業等や専門知識を有する区民や豊かな知識や経験、熟達した技術をもつ団塊世代や高齢者等を講師として、麻布地区に関する講座を開講します。受講した区民等が学んだことを地域での活動に生かし、地域の人びとへ還元することで、地域力を高めていきます。

全体計画目標 (26年度末)	現状 (23年度末見込)	事業計画			
		24年度	25年度	26年度	計
実施 認定者260人 協働による運営 ガイドマップの 作成(2,000部)	認定者 125人	実施 認定者45人 協働による 運営 ガイドマッ プの検討	実施 認定者45人 協働による 運営 ガイドマッ プの作成 (1,000部)	実施 認定者45人 協働による 運営 ガイドマッ プの作成 (1,000部)	実施 認定者135人 協働による 運営 ガイドマッ プの作成 (2,000部)

生活安全事業について

安全で安心なまちをつくっていくために ～防犯に関する助成制度があります～

住宅や地域の防犯について、港区では、さまざまな取り組みを行っています。各総合支所では、平成25年度から新たに、以下の防犯や生活安全のための助成制度を取り扱っています。

いずれの制度についても助成に対する要件がありますので、詳しくはお問合せいただくか、区のホームページをご参照ください。

住まいの防犯対策助成金

住まいの防犯対策にかかった費用(5,000円以上)の2分の1(100円未満切捨て)を助成します(上限額10,000円)。

共同住宅防犯対策助成金

助成対象建物の共用部分等に対し、区が対象としている防犯機器の設置にかかった費用総額の2分の1(100円未満切り捨て)を助成します(上限額50万円)。

町会や商店会等の団体を対象とする防犯カメラ等整備費補助、防犯カメラ等維持管理経費補助

助成対象団体が設置する防犯カメラ等の整備費と維持管理に関する経費を助成します(上限額あり)。

お問合せ/麻布地区総合支所協働推進課協働推進係

電話/03-5114-8802

上記助成制度に関する区のホームページ/<http://www.city.minato.tokyo.jp/seikatsuanzen/bosai-anzen/sekatsuanzen/jose/>

子育て座談会

みんなの子育てはどう？

育児で気になることについて、参加者と講師(心理士)が気軽に話しながら、みんなでほっとできる座談会です。



対象/麻布地区在住の区民で、3歳未満の子どもがいる保護者

①	日時	平成26年1月28日(火)午後1時30分～3時
	テーマ	「寝かしつけ」
申込み	平成26年1月6日(月)から1月20日(月)まで 電話申し込み	
②	日時	平成26年3月25日(火)午後1時30分～3時
	テーマ	「最近気になること」
申込み	平成26年3月3日(月)から3月17日(月)まで 電話申し込み	
場所	麻布区民センター	
①②共通	募集人数	10組(先着順)*保育対象は4ヶ月児から3歳児未満まで
	講師	元NHKラジオ「子どもの心相談」アドバイザー 内田 良子 先生
費用	無料	

お問合せ/麻布地区総合支所区民課保健福祉係 保健師

住所/港区六本木5-16-45

電話/5114-8822

港区麻布地区総合支所だより

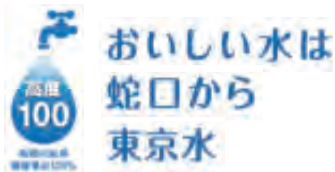


東京都水道局からのお知らせ

東京都水道局では、三郷浄水場など利根川水系の浄水場への高度浄水施設の導入を進めており、10月から、港区に利根川水系から供給される全ての水が、より安全で、おいしい高度浄水になりました。

ミネラルウォーターとの飲み比べでも、約半数の方が、水道水の方がおいしいと感じています。皆さまも是非この機会に、水道水を直接飲んでみてください。

お問合せ／東京都水道局港営業所 港区三田1-3-27
電話／03-5444-2091



水道事業への皆さまのご理解、ご協力により、港区内の水道水は、**高度浄水100%**になりました。

東京都水道局

麻布警察署からのお知らせ

●犯罪被害者の方々を支援します

◆犯罪被害者ホットライン

もう一度 あなたの笑顔を見たいから ～相談してみませんか～

電話／03-3597-7830 午前8時30分から午後5時15分まで
(土・日・祝日、年末年始を除く)

FAX／03-3592-6840 24時間受付



◆東京都公安委員会指定 犯罪被害者等早期援助団体 公益社団法人被害者支援都民センター

応援します あなたに笑顔 戻るまで
面接相談・直接支援は必要に応じて行います。



電話／03-5287-3336

月・木・金曜日 午前9時30分から午後5時30分まで

火・水曜日 午前9時30分から午後7時まで

(土・日・祝日、年末年始を除く)

FAX／03-5287-3387 24時間受付

ホームページ／<http://www.shien.or.jp>



麻布警察署 犯罪被害者係 電話／03-3479-0110 内線2152

わが町の青少年委員・スポーツ推進委員

青少年委員及びスポーツ推進委員は、教育委員会が委嘱して、中学校区ごとに活動し、地域の皆さんが健康で楽しく豊かな毎日を送るための幅広い活動を行っています。



青少年委員とスポーツ推進委員との交流会の様子

青少年委員は、青少年対策地区委員会事業「みなとキャンプ村」や地域での行事等をはじめ、地域における青少年健全育成の中心的役割を担っています。また、地域と行政とのパイプ役としてさまざまな活動を行っています。

スポーツ推進委員は、地域の身近な施設を利用して「地域スポーツ教室」を年間8回程度実施しています。参加費無料の体験型スポーツ教室です。また、総合型地域スポーツ・文化クラブ(スポーカル六本木)の運営支援等も行っています。是非参加して、仲間作りや健康維持のきっかけとしてみてはいかがでしょうか。

各種お問い合わせは、下記まで遠慮なくご連絡ください。

お問合せ／青少年委員について

生涯学習推進課生涯学習係 電話／03-3578-2743

スポーツ推進委員について

生涯学習推進課スポーツ振興係 電話／03-3578-2747

●振り込め詐欺増加、発生件数も被害額も！

平成25年8月末で都内における「振り込め詐欺」被害は、発生件数が1,636件、被害総額約53億円です。麻布警察署管内における「振り込め詐欺」被害は発生件数が9件、被害総額約1,600万円です。

◆オレオレ詐欺の手口と対策

息子や孫を名乗って「携帯電話をなくした。携帯電話番号が変わった。」等と電話が架かってきたら、振り込め詐欺犯人からの電話です。行動を起こす前に必ず息子さんやご家族に確認をしましょう。

◆還付金詐欺の手口と対策

社会保険庁や港区の職員を名乗って「医療費の還付金があります。キャッシュカードと携帯電話を持って、近くのATMに行き手続きをして下さい。」等と架かってきた電話は、還付金詐欺犯人からの電話です。銀行のATMを利用した医療費の還付手続きは絶対にありません。

麻布警察署 防犯係 電話／03-3479-0110 内線2612、6502

エコプラザ 充実の講座やイベントを行うエコ発信基地



1階は、地域の人々が自由に利用できる多目的スペースとして開放。環境・エコについての本や講座のパンフレットなどが置かれています。

浜松町1丁目にある区立エコプラザ。環境学習施設として開設して今年で6年目になり、より一層地域の人々が気軽に環境を学べる場となるよう、さまざまな活動を行っています。

エコプラザでは、NPOや各種団体、企業などと連携し、多数の講座やイベントを開催しています。港区と地方自治体が連携して行う環境活動の展示や、英語と日本語で学ぶコーチング体験、区内の自然に触れて顕微鏡観察をする小学生の自然教室、映画鑑賞会、などバラエティ豊かに揃っています。大人の方もお子さんも、お勤めの方も、興味のある講座に参加して、環境を再発見し、エコについて考えてみませんか。

お問合せ／エコプラザ 浜松町1-13-1 電話／03-5404-7764

ホームページ／<http://minato-ecoplaza.net/>



エコプラザの玄関前と奥にはビオトープを設置。木々に囲まれた小さな池には、小さな水生生物も生息し、多くの子どもたちが鑑賞しに訪れています。

ザ・AZABUへのご意見・ご要望をお寄せください



ご住所・氏名・職業(学校名)・電話番号・ご意見・ご要望(日本語又は英語、字数・様式自由)を書いて、直接又は郵送・ファックスで、〒106-8515 港区六本木5-16-45 麻布地区総合支所 協働推進課へ。

●電話／03-5114-8802 ●FAX／03-3583-3782

編集委員を募集しています

地域情報紙「ザ・AZABU」はホームページからご覧になれます。



「ザ・AZABU」は英語版も発行しています。

ザ・AZABU

●配布設置場所のご案内
六本木1丁目、六本木、広尾、麻布十番の各地下鉄の駅、ちいばす車内、みなと図書館、麻布図書サービスセンター、南麻布・本村・麻布・西麻布・飯倉の各いきいきプラザ、麻布区民センター、麻布地区総合支所等
●本紙掲載の記事・写真・イラストの無断転載を禁じます。

Chief 田中亜紀
Sub Chief 高柳由紀子
Staff 出石供子 永浜和美
大澤佳枝 満木葉子
大村久美子 森明
尾崎恭彦 森井友紀
折戸桂子 山下良哉
田中康寛
Junior Staff 熊坂瑠家 守山ジョシュア
高橋洸汰

編集後記

今回は編集委員になって「良かったな～」と思えたことを簡単に。麻布にたくさんあることは知っていましたが、「大使館」の中を実際に見て、さらに、大使と直接お話しができ、取材を通して、遠い海外をものすごく身近に感じることができました。自分が生まれ育った「港区」には、まだ見ぬ貴重で楽しい事柄が山とあります！区民の皆様にも少しでも「麻布の楽しさ」を伝えられるよう精一杯頑張ります！ (田中康寛)

「みなとコール」は暮らしの疑問にまとめてお答えします！

区役所のサービスや施設案内、催し情報など、お気軽に問合せください。年中無休/午前7:00～午後11:00 ※英語での対応もいたします。

電話／03-5472-3710 FAX／03-5777-8752
Eメール／info@minato.call-center.jp

“Minato Call” information service
Minato call is a new city information service, available in English every day from 7 a.m. - 11 p.m.
Minato Call: Tel: 03-5472-3710; Fax: 03-5777-8752; E-mail: info@minato.call-center.jp